THE FRONTIER TIMES
Report

1 「未来を育てるマナビラボ」で名古屋国際の授業が紹介されました！

東京大学大学総合教育研究センターと日本教育研究イノベーションセンター（JCERI）による共同プロジェクト。「未来を育てるマナビラボ：ひとはもともとアクティブ・ラーナー！」の取材を受けました。

「未来を育てるマナビラボ：ひとはもともとアクティブ・ラーナー！」は、高校でのアクティブ・ラーニング型授業を調査・研究し、その魅力を発信する東京大学大学総合教育研究センターと日本教育研究イノベーションセンター（JCERI）による共同プロジェクト。Webサイトには全国の学校が取り組んでいる、多彩な授業が紹介されています。

今回、取材の対象になったのは本校の独自カリキュラム『SIA特論』。高2・高3を対象に「経済活動と貧困」「多文化共生と減災」「社会生活と循環」という3つのテーマで国際的な社会課題への理解を深め、自己の関わりを意識し、解決のための実践スキルを磨く授業です。具体的な社会課題に対する①個別調査、②グループディスカッション、③プレゼンテーションを通じて、生徒たちは「知識をどのように活用するか」を主体的に学んでいきます。

当日に行われたのはプレゼンテーション発表。生徒たちは5つのグループに分かれ、人口、環境、産業などを

▲「未来を育てるマナビラボ」の取材を受けた授業の様子

設定した"架空の島"が抱える社会課題を探り、解決のための具体的な方法を提案しました。「社会の課題を自身の問題として考え、主体的に関わる姿勢を身につけることが目標。その手段としてアクティブ・ラーニングを活用しています」と語るのは『SIA特論』を担当する黒宮祥男先生。この日の授業では、解決策がまとめられた各グループの"ブース"を生徒たちが巡回し、それぞれの政策に対する改善点や実現可能性を評価。意見交換や発言の機会が多く、プレゼンテーションと検証・改善を繰り返すことで表現力に磨きがかかり、どのグループも洗練された内容を披露していました。

▲『SIA特論』を担当する黒宮祥男先生

「知識を"教える"ことは簡単ですが、自ら"気づく"ことで理解はより深まります。教員は方向性を示すファシリテーターの役割に徹し、生徒たちが自身で学びの内容を膨らませていってほしい」と黒宮先生。取材に訪れた「未来を育てるマナビラボ」の担当者も、先生の発言回数の少なさに驚いていたそうです。また、専門教科の異なる教員が協働し、授業研究を重ねていることも『SIA特論』の大きな特徴です。社会問題にはさまざまな要素が複雑に絡んでおり、課題の発見と解決には多角的な視点が不可欠。教科の垣根を越えた分野横断的な発想から、授業内容の充実をめざし改善を重ねています。

そもそも今回の授業取材は、3月に実施した本校の『合同報告会（SGH活動・サステイナブルスクール活動・国際バカロレア・ディプロマプログラム）』の際に、東京大学大学総合教育研究センターが行ったアンケートで「『SIA特論』の授業が面白い！」と答えた"生徒の声"がきっかけで実現したもの。「主体的に学ぶことの楽しさに気づいてほしい」と微笑む黒宮先生の想いは、しっかりと生徒に心に届いているようです。

「未来を育てるマナビラボ」とは

東京大学 大学総合教育研究センター 中原淳研究室と日本教育研究イノベーションセンターが立ち上げたプロジェクト。日本全国の高校で授業をしている先生方の授業をさらに「インタラクティブ」に、さらに「知的にわくわく」したものにするお手伝いをしています。

●「未来を育てるマナビラボ」 http://manabilab.jp

Feature

国際理解研修の新たな拠点として、
今年度から設置された「ロサンゼルスコース」。
カリフォルニア州立大学フラトン校附属語学学校を舞台に、語学レッスンと
アクティビティを融合させた探究型プログラムに中高一貫生5人が参加。
現地での体験をふり返る生徒の声をもとに、コースの魅力を紹介します。

国際理解研修「ロサンゼルスコース」概要

アメリカ西海岸のロサンゼルスにある「カリフォルニア州立大学フラトン校附属語学学校」での語学レッスンとアクティビティを融合させた21日間のプログラム。カリフォルニア州立大学フラトン校の寮で異国のルームメイトと部屋を共有し、その寮生活の中で生徒たちは自然と国際感覚を磨きます。

▲カリフォルニア州立大学フラトン校附属語学学校

国際理解研修「ロサンゼルスコース」カリフォルニア州立大学で探究プログラムを受講！

さまざまな国籍の"仲間"と英語で交流

多様な民族が共生するアメリカを舞台とした国際理解研修「ロサンゼルスコース」は、中高一貫コースの生徒を対象にした3週間のプログラム。カリフォルニア州立大学フラトン校附属の語学学校で生きた英語を学び、アクティビティや寮生活を通して、世界各国の若者と交流を図る探究型の研修です。実施初年度となる今年は、「アメリカ文化に触れ、楽しく英語力を鍛えられそう」「同世代の"外国人の友だち"を作りたい」という意欲的な生徒5名が参加。英語学習にアクティビティにと、忙しくも充実した日々を過ごしました。

毎日、午前中に行われた英語研修の内容は、会話やコミュニケーション活動を中心とした実践的なレッスン。能力別のクラスに分かれ、簡単なディスカッションをしたり、日常生活で役立つフレーズを学んだり、それぞれのレベルに合わせて英語力を磨きました。「レッスンで学んだことを、その日のアクティビティや寮生活で"腕試し"できるので、自分から積極的に英語で話しかけ、コミュニケーションを楽しみました」と振り返るのは奥村友將君。参加した5名の間の会話でも、初めの数日間は日本語を使っていましたが、次第に英語を使う場面が増えていったそうです。平林良介君も「とにかく英語を使う場面がたくさんあったので、初日には聞き取れなかった単語が、3週間の間に少しずつ聞き取れるようになりました」と成長を実感。発音やイントネーションの細かなニュアンスなど、実践を通して"違い"に気づけたことは、これから英語を学んでいく上でも大きな収穫となりました。

午後のアクティビティでは、ディズニーランドやロデオドライブ（ビバリーヒルズ）など、さまざまな観光地を訪問しました。「日差しは強かったけれど、日陰は日本より涼しくて風が気持ちよかった。サンタモニカビーチでサイクリングをした時の、美しい景色がとても印象に残っています」と笑顔を見せる早瀬登君。一方、志水瑠斗君は日本人と外国人との時間感覚の違いを実感。「一部の国の人は集合時間に遅れても、気にする素振りがなく驚いたけれど、ある意味では"良い経験"になりました」と苦笑い。アメリカだけではなく、世界各国の多様な文化・習慣に触れられたことも、「ロサンゼルスコース」ならではの経験だったといえるかもしれません。

学生寮での共同生活を通じ精神面でも成長

世界中から集まった同世代の仲間と、大学の学生寮で共同生活を送ることも「ロサンゼルスコース」の大きな魅力のひとつです。生徒たちはフランス、ロシア、ウクライナ、ドミニカ、カザフスタンなど、異国のルームメイトと部屋を共有。食堂で一緒にテーブルを囲んだり、バスケットボールやバレーボールを楽しんだり、英語を使って"国際交流"を楽しむ時間がたくさん用意されています。フランス人がルームメイトになった志水君は、「しばらくは朝と夜にあいさつをする程度だったけれど、時間が経つにつれて会話する時間は増え仲良くなれました。別れの時に扇子をプレゼントしたら、とても喜んでくれました」と笑顔。それぞれの"お国訛り"の英語でも、円滑にコミュニケーションが取れることが分かると、自ずと会話が弾んでいったそうです。

生徒たちを現地で見守った引率の大西康介先生は、「参加者の中には英語に対して苦手意識を持っていた生徒もいましたが、いろいろな活動を通して少しずつ、確実に英語能力を向上させていました」と笑顔。さらに「何より印象深かったのは、それぞれが精神面で成長してくれたこと。外国人のフレンドリーな姿勢にも導かれ、食堂ですれ違ったときにハイタッチをするなど、一日ごとに積極的にコミュニケーションを楽しむようになりました。それにつれて、表情も明るくなっていきました」と、その成長に目を細めます。

また、研修期間中にはSGH活動を通じた交流の一環として、カリフォルニア大学アーバイン校への大学見学も実施しました。将来は農業に携わることを目標としている早瀬は、「アーバイン校も農学分野の研究で有名な大学だったので、施設を見学してキャンパスの雰囲気を感じて、たくさんの刺激を受けることができました」と目を輝かせます。

たくさんの人と交流し、多様な文化に触れ、英語能力と国際感覚を磨いた「ロサンゼルスコース」。「今回の経験を学校生活につなげて、さまざまなことに積極的にチャレンジしていきたい」（奥村君）、「『英語を使ってもっといろいろな人と交流したい』と英語を学ぶモチベーションが上がった」（平林君）など、生徒たちは研修で身につけたスキルや感覚を"個性"に変換し、国際社会の発展に向けて行動できる国際人を目指します。

▲研修の思い出を振り返る。左から／早瀬登君、平林良介君、大西康介先生、志水瑠斗君、奥村友將君（生徒はいずれも中高一貫5年）

◀ライアン教授による授業の様子

◀2日に一度のテストに挑む生徒

◀カリフォルニアの人気スポットの「ディズニーランド」での記念撮影

THE FRONTIER TIMES
Report

2 グローバル経済について英語で議論「Global Discussion」に参加

8月下旬、SGH指定校・アソシエイト校を対象とした「Global Discussion」が名古屋大学教育学部附属中・高等学校で行われました。本校からは5名の生徒が参加し、英語での議論を通して学びを深め、たくさんの刺激を持ち帰りました。

8月21日・22日の2日間にわたって開催された「Global Discussion」は、英語ディスカッションを通して表現力やコミュニケーション能力を磨く、SGH指定校・アソシエイト校の交流イベント。本校の参加は今回が初めてでしたが、5名の生徒が「自由主義経済と保護主義経済の衝突 ～日本はどうあるべきか～」というテーマのもと、経済学や社会学の視点からグローバル社会を学び、将来、自分が活躍するために必要な能力について理解を深めました。

「高校生にはやや難しいテーマでしたが、それぞれに『英語で議論する経験がしたい』『視野や人脈を広げて、スキルを磨きたい』という目的意識を持ち、意欲的な態度で取り組んでいました」と話すのは内藤圭祐先生。参加前に事前課題に取り組み、自分なりの意見をまとめた生徒たちは、会場で初めて顔を合わせた他校の"仲間"とグループを結成。互いの考えに耳を傾け、時間をかけてチームとして意見をまとめ、プレゼンテーションを行いました。

▲当日の生徒の様子を語る、内藤圭祐先生

一方の立場から主張を戦わせるディベートとは異なり、「Global Discussion」では多角的にものごとを見つめ、メリットやデメリットを冷静に分析することが重視されます。集団としての合意を形成するため、"妥協する能力"の育成を目標のひとつに掲げていることも大きな特徴です。最終プレゼンテーションでは、どのグループも自由主義経済と保護主義経済それぞれの課題を明らかにした上で、日本のあるべき姿（＝解決案）を提示していたそうです。

また、当日は名古屋大学に通う外国人留学生が生徒たちをサポート。ディスカッション後に開かれた交流会でも、積極的に話しかけ英語でのコミュニケーションに親しみました。「外国人の視点や、他校の生徒の価値観に触れられたことは、とても貴重な体験になったのでは」と目を細める内藤先生。実際に「Global Discussion」を振り返る生徒のレポートには、「いろいろな人に出会い、たくさんの刺激をもらった」「自分の意見を持つことの大切さに気づいた」など、前向きな感想ばかりでした。

SGHアソシエイト校の指定を受け、ますます学びの環境が充実する本校の国際理解教育。校内の掲示板にも交流イベントの情報が増え、生徒や教員が積極的に校外活動に参加しています。「今後もさまざまなネットワークを活用して、国際社会で活躍するために必要な力を磨く"きっかけ"を用意したいと思います。生徒たちが主体的に活動し、人脈を広げていく中で、個性を発揮できる場所を見つけてほしい」と内藤先生。いつの日か生徒たちから『先生、こんなイベントがありますよ』と教えられる日が、やってくるかもしれません。

▲「Global Discussion」に参加した生徒たち。左から／高橋里奈さん（国際教養科2年）、吉田凌さん（国際教養科2年）、有田帆風さん（中高一貫6年）、伊藤永遠さん（中高一貫6年）、ホシマンド玲奈さん（中高一貫6年）